

一 幕末の狩野派と奥絵師

狩野春川友信（号一青齋、一八四三—一九二二）は天保十四年三月二十五日に江戸築地に生まれた。父は奥絵師の浜町狩野家八代、狩野董川中信（号全樂齋、一八一—一八七二）である。明治になって友信が出身した東京美術学校の履歴書にはそのように記されている。父の生家木挽町狩野家の絵所で七年間の絵画修行を経て、十六歳のときに十四代將軍徳川家茂により、父董川の見習として奥絵師に召し出された。幕府御用をつとめ、また洋学研究のために設置された開成所で洋画を学んだ。十五代將軍徳川慶喜による大政奉還に続いて幕府が廃止された際には二十四歳になっていた。

それまで幕府の庇護のもとにあった奥絵師たちは明治になって大きく運命が変わることになる。友信は明治六年（一八七三）より文部省に出仕、開成学校に出勤して、のちに東京大学予備門で画学を教えることになるが、これは幕末の洋画修行と無関係ではないと思われる。この頃東京大学お雇い外国人教師として来日したアーネスト・F・フェノロサと出会って日本画の鑑定を教え、狩野宗家当主で叔父の狩野永恵（たつのぶ）立信を紹介し、また木挽町絵所とともに学んだ狩野芳崖（かろうぼうがい）を引き合わせたことで知られる。二十二年開校の

東京美術学校では絵画教諭、のちに助教授となり、二十九年に辞職している。その後は東京盲啞学校で教え、四十五年に六十九歳で没している。

狩野友信が生まれ育った幕末の築地とはどのようなところだったのだろうか。その人となりは江戸築地で形成されたと考えられる。「狩野五家譜」によれば、浜町狩野家は両国米澤町の拝領屋敷を町人に貸して、近くの山伏井戸に地所を借りて住んでいたが、後に深川浄心寺脇に移り、六代舜川昭信の時代に築地門跡裏住居に転居していた。七代友川助信が早世して、木挽町狩野家から当主伊川院栄信の五男董川中信が養子に迎えられ、友信が生まれた。安政五年（一八五八）の「諸向地面取調書」によれば、狩野董川中信は「浜町山伏井戸御奥医師石坂宗哲」の地面を借りて住んでいたとされる。十六歳になった友信が將軍家茂により奥絵師見習を仰せつかった翌六年には林町に住居があったとみられる。また友信が修行した狩野派の木挽町絵所があつたのは、現在の銀座五丁目。今は首都高速道路となつているが、昭和三十七年（一九六二）まで流れていた築地川にかかる采女橋を渡ると築地である。

狩野派の発端は中世、足利將軍家に仕えた狩野正信とされる。正信が活躍したのは、御用絵師の周文、宗湛、そして在野の雪舟等、相国寺の禅僧たちが壇画の中心であつたのに続く時代である。正信はやがて將軍足利義尚の命を受けて、肖像画や障壁画を制作するようになり、初代の御用絵師として、狩野家の地位を確立していった。正信の直系が狩野宗家を名乗ることになるのだが、正信から数えて四代目にあたる永徳州信（一五四三―一五九〇）は信長や秀吉に重用され、桃山時代を代表する絵師となつた。

永徳の次男孝信の長男、探幽守信（一六〇二―一六七四）は宗家ではなかつたが、才能を認められて多くの名品を後世に残し、狩野派の名を不動のものとした。探幽は弟の主馬尚信（一六〇七―一六五〇）とともに徳川家康に従つて京都から江戸に移り、江戸城の鍛冶橋門外に屋敷が与えられて御用絵師となり、鍛冶橋狩野家の初代となつた。江戸狩野の宗家である中橋狩野家は孝信の三男安信が継いだ。一方尚信は竹川町、後の木挽町狩野家の初代として分家する。また浜町狩野家は木挽町家二代常信の次男、随川岑信（一

六六二―一七〇五)の分家に始まる。岑信が六代將軍家宣いへのふの寵愛を受け、奥医師並を仰せつかったのが奥絵師の始まりであつたとされる。待遇は拝領の屋敷と二百石二十人扶持の俸禄を受けることになつていた。江戸時代末には、宗家である中橋狩野、それに鍛冶橋狩野、木挽町狩野、浜町狩野を加えた四家が徳川幕府の奥絵師として並立していた。名前はそれぞれ幕府より与えられた屋敷の所在地による。四家は縁戚関係にあり、協力して幕府の絵画制作にあつた。

奥絵師系図より(二部省略)

宗家・中橋狩野家

祐勢正信(初代)――永仙元信(二代)――松榮直信(三代)――永徳州信(四代)――右京光信(五代)――左近貞信(六代)――
 永真安信(七代)――右京時信(八代)――永叔主信(九代)――永真憲信(十代)――祐清英信(十一代)――永徳高信(十二代)――
 永賢泰信(十三代)――祐清邦信(十四代、鍛冶橋家より)――永惠立信(十五代、木挽町家より)――祐正忠信(十六代、養子)

鍛冶橋狩野家

探幽守信(初代、宗家より)――探信守政(二代)――探船章信(三代)――探常守富(四代)――探林守美(五代)――探牧守邦(六代)――
 探信守道(七代)――探淵守真(八代)――探原守経(九代)――探美守貴(十代)――探岳守節(十一代)――探道

竹川町↓木挽町狩野家

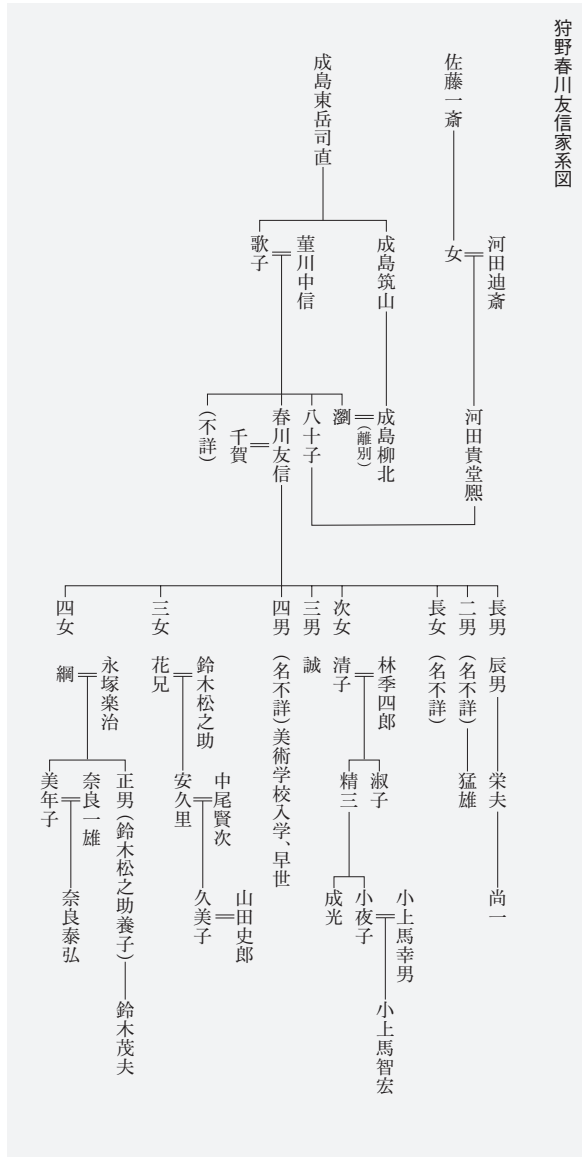
主馬尚信(初代、宗家より)――養朴常信(二代)――如川周信(三代)――栄川古信(四代)――受川玄信(五代、浜町家より)――

――栄川院典信(六代)――養川院惟信(七代)――伊川院栄信(八代)
 晴川院養信(九代)――勝川院雅信(十代)
 信義興禎(朝岡家へ)
 菫川中信(浜町家へ)
 永惠立信(中橋家へ)

浜町狩野家

随川岑信(初代、木挽町家二代、常信二男)――随川甫信(二代、常信三男)――常川幸信(三代)――閑川昆信(四代)――
 融川寛信(五代)――舜川昭信(六代)――友川助信(七代)――菫川中信(八代、木挽町家より)――春川友信(九代)

狩野春川友信家系図



奥絵師とは奥医師、奥儒者などと並ぶ幕府の世襲の役職である。旗本と同様の扱いを受け、将軍に直接会って話すことが許されたいわゆる御目見以上の格式であった。幕府の奥絵師には狩野四家以外に土佐二家があり、合わせて六家の世襲であった。奥絵師に次ぐ御用絵師としては、表絵師がいた。奥絵師の仕事は、将軍の肖像画の制作に始まり、江戸城の障壁画を始めとする調度品の制作や修繕、日光東照宮の絵画作成、養子や嫁に下った将軍の子女の持参品、諸大名等への贈呈品等の制作など、多岐に渡った。後述するが、友信の父中信も、また友信自身も奥絵師として、このような役目を担ったのである。

安定した徳川長期政権の庇護のもとに地位を保証された狩野派の絵師たちは、日本全国の大名家にも仕えるようになっていたが、その頂点にあったのが奥絵師の当主たちといえよう。奥絵師は定期的に登城して制作の御用を仰せつかり、大奥の「御絵部屋」に出仕して絵を描き溜めましたが、屋敷に持ち帰って弟子たちで手分けして仕上げることも多かつたという。奥絵師の御用に対しては「御絵本途」といわれる定額の画量が、大きさや画題に応じて定められていた。制作以外に副業として古画の鑑定を行っていた。持ち込まれた古画を模写して残すことは、弟子の育成にあたり、日本および中国の古画の模写を尊重する、いわゆる粉本主義をとっていたことに通じる。このため絵師個人の才能がほとぼるような名品が生まれにくい土壌があつたとの見方があるが、これもまた事実であろう。封建社会に特有の組織的な絵画の職能集団だったのはまちがいない。

幕末に狩野派の中心となっていたのは、宗家である中橋家よりはむしろ木挽町家であつた。寛政年間に木挽町家六代の栄川院えいせんいんみづのぶ典信（一七三〇―九〇）が、時の老中田沼意次に取り入って、田沼邸に隣接する土地に屋敷を賜わつたとされる。七代養川院、八代伊川院と続いて、江戸狩野派の取りまとめ役ともいえるべき頭取をつとめた。中でも重要なのが度重なる出火によって消失した江戸城の各御殿再建に関わる御用である。九代晴川院せいせんいんあらのぶ養信（二七九一―一八四六）は、天保十年度（一八三九）の西の丸および引化二年度（二八四五）の本丸再建において、幕府との調整役として奥絵師、表絵師、それに町絵師も加えた狩野派の事業の指揮をとつた。狩野派御用絵師たちのいわば最後の大規模協働事業の様子を『公用日記』に残している。